

第3章

全体討議 1

3.1 歴史的評価はどこまで有効か

田島 頭の整理のためにお聞きしたいのですが、核分裂炉の基本的な動機は何かについて、吉岡さんはどうとらえていらっしゃるのでしょうか。この質問をする理由は、核融合研究にあたって、いつも論理が作られてこなかったので、この30年間くらい核分裂を参考にしてきたからなんです。

この点について、原子力政策に関するいろいろな重鎮の方々にお話を伺ったのですが、説明の仕方には、そのときどきの流行があるようですね。しかしある大物の人の言葉を借りれば、「世の中の1万人のうち、8000人は馬鹿だから、彼らに説明する言葉と、よく分かっている2000人に対する言葉は分けなければならぬ」と。吉岡さんが、なぜ関係者は強気なのかとおっしゃっていますが、これは“馬鹿”な8000人に言う言葉なんですね。専門家では強気一本やりの人はほとんどいません。ホンネの部分聞いたところ、30年間一貫して不変の動機は、軍事目的なんですね。世界的に見てそうです。しかし日本ではあまりおっしゃりに言えない。だから、国によって進捗状況が変わるのはなぜかと言えば、原水爆の開発状況に影響されているからです。つまり原爆も水爆も十分に開発してもう不要という国もあれば、国家セキュリティのために原爆も水爆もいつでも持てるようにしておきたい国もあるわけです。

吉岡さんはこれについて、どのようにお考えでしょうか。

吉岡 非常に難しい問題提起だと思います。私は歴史家なので、軍事目的が具体的な原子力政策をどこまで動かしたかは検証したいですね。いろいろな状況証拠はありますし、また核燃料サイクル開発計画を続けるという決定があるたびに、

背後で政治勢力が動いたという推測も可能ですが、私自身は確たる証拠が得られていないので、それについての明言は差し控えたいと思っています。私のスタンスとしては、軍事目的で開発しているだろうからという論旨で批判するよりは、総合政策評価において劣るから政府が支援介入すべきではないと考えます。政策論としてはそのレベルで議論したいと思います。30年間不変なのは軍事目的しかないというのは事実かもしれませんが……。

田島

私がおのことに質問した理由は、軍事目的がいいかどうかの議論をしたわけではなくて、吉岡さんが冒頭に歴史的評価について述べられたわけですが、ホンネのところは何かという部分を把握できないと、ホンネに基づく政策決定ができず、20年くらいたつと、まったく別の方向に行く可能性があると思うからです。はたして、ホンネを探る歴史的評価はできるのでしょか。私も30年位、核融合研究をしています。後輩から、ある時点での選択をたずねられても、その理由を答えられないんです。歴史的な事実をとらえることがいかに難しいかを身にしみて実感している立場から言うと、歴史的評価は本来できるのか、という気がします。それができれば、政策に反映できるでしょう。でもできなければ、決定権を握っている一部の人たちによって決定されてしまうでしょう。先ほどの吉岡さんの説明だと、皮相的な状況だけを見て判断するしかないというふう聞こえてしまうんです。タテマエで書かれた報告書に基づいて、効果の有無を判断しながらいくしかないのでは、という意味に聞こえてしまいます。そうすると、歴史的評価は無意味ということになりかねないのではありませんか。

吉岡

ホンネの議論は、私自身、それほど好きではないということがありますね。政策論は、ホンネではなく、タテマエで通すしかないと思っています。政策合理性はそのルールの中で考えるべきで、人によっては裁判と同じとも言います。一部の人のホンネでモノが動かないようにするというのが、私の考えている解決策でもあります。

3.2 他のアプローチと比較した歴史的評価のメリットは

柳本

今の質問との関係でお聞きしたいのですが、軍事目的、安全などで技術問題を論じる方向が多いけれども、吉岡さんは、歴史的評価という方向からアプロ

ちしようとしているわけですね。その存在意義は当然あると思いますが、なぜ歴史を追うことによって、技術的評価について、他のアプローチより有効性が出しうるのか、その根拠はどこにあるのでしょうか。一長一短はあるでしょうが、どうもそのメリットの部分がわかりにくいように思いました。

吉岡 いまなぜ、核燃料サイクルのために六ヶ所村に再処理工場が建設されているか。それは政府が電力会社に作らせていると思われるが、原子力の外部の人にとっては謎でしかないわけです。たとえば経済自由主義者の立場から言えば、そういう選択は、個別電力会社の自由選択に任せるべきであると考えerでしょう。私の立場は、政策の正統性の理由がないものが、なぜ世の中にこれほど多く存在しているか、なぜそういう状況になったかを歴史的由来をたどって明らかにしようというものです。たとえば日本の原子力推進構造と、そこでの政府、民間との関係などを明らかにすることによって、一見不可解な現状を理解し、評価していくわけです。

柳本 そういう歴史的評価の手法は、エネルギーの問題以外にも、たとえば生命倫理、宇宙などでも適用できると考えていらっしゃるのでしょうか。それともエネルギー分野で特に有効性を発揮すると考えていらっしゃるのでしょうか。

吉岡 基本的にはどの分野でも妥当するでしょうが、生命倫理は技術ではないと思うので、この方法はちょっと対象が違うかもしれません。

江尻 科学史という観点で考えると、技術には社会に受け入れられるものと受け入れられないものがあると思いますが、原子力では中途半端な状態のような気がします。一方、携帯電話、自動車、飛行機などは安全基準も違いますが、社会への受け入れられ方は原子力とは明らかに違います。受け入れられる技術、受け入れられない技術の差はどこにあるのでしょうか。あるいは、そういう区別はよくないのかもしれませんが。

吉岡 でも、原子力は日本では受け入れられている技術でしょう。日本だけで52基の商業炉があり、これは土地面積あたりの密度から言えば世界一です。そういう意味では、受け入れられた技術だと思えますが、これ以上の受け入れには赤信号がともっています。赤信号をともしているのは、地元の抵抗というより、ビジネスとして展開できるかどうかでしょう。新增設に限って言えば、電力会社サイドの意思のほうが強く働いているのではないかと思います。あえて一般化

をすれば、原子力の場合、容認、拒絶の要因はきわめて多様であり、危険だから受け入れていないというわけではないし、むしろ受け入れています。これ以上受け入れられないのは、経済的理由が優先しているからだと思います。分野によって、答えは多様なのではないのでしょうか。

小川 原子力の批判として指摘された、「素性の悪いポンコツ技術」の意味について、もう少し説明していただけますか。

吉岡 素性は見方によって良くも悪くもなりますが、私が主として見ているのは、軍事とのリンケージと経済性です。この2つが原子力発電の興亡を決めた要因だと思っています。経済性に関しては、政府が大胆に介入して原子炉の新增設が成り立つような仕組みを作ってきた。それによって原子力が推進されてきました。「素性の悪い」というのは、政府が一生懸命支えなければいけない技術だということが、第一義的な意味です。ひとり立ちできない技術であるとも言えます。国が抱えて支えなければ存続できず、軍事にも転用される可能性があり、その思惑がらみで成り立っている技術です。基本的なイメージはそういうところですよ。